

《抄 訳》

ドリス・レスリング 『社会問題、神話、そして、物語』

(訳) 松 村 豊 子*

解 題

物語はいつ、どのようにして誕生したのか。物語はどのように人々の生活を豊かにするのに役立っているのか。物語とはそもそも一体何なのか。このような興味深い問題を提示し、物語の社会的な機能について考えをめぐらせ、その起源をイスラム教神秘主義の『スーフィ物語』(*The Sufis*, 1964)に求めたのが、ここで日本語に訳出するドリス・レスリング(Doris Lessing, 1919-2013)の「社会問題、神話、そして、物語」(“Problems, Myths and Stories” 1999)である。このエッセイは読書ができない若い世代への対処や高学歴偏重の教育問題など日本でも近年熱心に論じられる社会問題が満載の論考であり、私たちが抱える閉塞しがちな教育問題に一石を投じることができるのではないかと考え、ここに訳出した。

レスリング独特の論の内容と展開については本文を読めば明らかであるが、まず、序文にかえて、レスリングと『スーフィ物語』を英訳したイドリース・シャー(Idries Shah, 1924-96)との出会いについて簡単に紹介したい。レスリングは南アフリカを舞台にした処女作『草は歌っている』(*The Grass is Singing*, 1949)でイギリス文学界を代表する作家の1人として世界に認められた後、大作『黄金のノートブック』(*The Golden Notebook*, 1962)を発表し、作家としての社会的地位

を不動にした。作家として世間に認められる一方、彼女自身は西欧文化全般に対して非常に懐疑的になっていた。この疑心の一端は彼女の作家活動以外の様々な行動となって顕れる。私生活においてはジンバブエを離れ、ロンドンへの旅を共にしたドイツ人の夫と離別し、音信不通の間柄となる。また、政治活動について言えば、ソビエト連邦のポーランド侵略を機に第2次世界大戦前後に傾倒していた共産党から1956年に離脱する。この間の喪失感はいかに強烈すぎ、彼女はこれを直接的に言葉にできなかったと思われる。自伝ではこの間の絶望感を次のように述べている。『『黄金のノートブック』の執筆中、自己の内面を鋭く抉り、多層的な心模様をつぶさに描くうちに、思想や思いや感情の限界に達し、それまで不可能として排除したことが一気に身に迫った』(『影を歩いて』*Walking in the Shade*, 319)。西洋文化の限界を熟知したにも関わらず、彼女は西欧文化から東洋文化他の異文化への転向をテーマにした小説を書くことはなく、ロンドンに住むアジア・アフリカ圏出身の移住者の生活を描くに止まった。東洋と西洋の文化構造の溝は果敢に真実を追求し続けたレスリングにも埋められないほど長く深かったのである。とは言え、彼女が西洋文化の限界を超え、理不尽な経験を面白く感じるために東洋文化へ救いの道を求めたのは確かである。後年、自伝を執筆するようになった1990年には偉大な文学作品を読み漁り、「人生について彼女自身が既に達していた結論や発見を映し出す考え方や人生観を夢中で探していた」(「わたしを変えた1冊の本」

* 江戸川大学 情報文化学科教授

“A book that changed me” 212) と淡々と語っている。『スーフィ物語』はトルストイの『戦争と平和』、スツゲーネフの『父と息子』、ドストエフスキーの『白痴』、スタンダールの『赤と黒』、プルーストの『失われた時を求めて』等々の古今東西の名作を読んだ後に彼女が出会った運命の1冊であったと言っても過言ではない(同上, 212)。

「社会問題, 神話, そして, 物語」はドリス・レッシングが1999年にロンドンの文化研究所で現代のイギリス社会が抱える社会問題(若者の活字離れ)とその解決策(西洋文化と東洋文化が未分化時代に誕生した原典の物語である『スーフィ物語』の理解と周知)について語った講演原稿である。この文化研究所は1965年にレッシングと彼女が東洋文化の紹介者として高く評価したイドリース・シャー(Idries Shah, 1924-96)が1965年に協力し設立した原理的な思想を理解するための協会(the Society for Understanding Fundamental Ideas)を前身としている。スーフィはイスラム教の神秘主義であり, シャーはインドに生まれ, イギリスで育ったスーフィ教徒である。レッシングがシャーと実際に顔を合わせたのはシャーが英訳の『スーフィ物語』を出版した1964年であるが, この年は2人にとって記念すべき年となった。

レッシングとシャーとの関係について述べると, 彼女が彼のイギリス文学界における力強い後ろ盾だとすれば, 彼は彼女の精神的な指導者だった。『黄金のノートブック』を執筆出版した1960年代前半には西洋文明への懐疑心は彼女の身心を救い難く不安定にしたようである。シャーとの出会いは彼女の精神的な復活を意味した。彼女は後年, シャーが没した時, 『スーフィ物語』と出会った感動を次のように簡潔に述べている。

正真正銘のスーフィ教の指導が出現したと聞き, 『スーフィ物語』と単純に呼ばれる本を待ち望んだのは私一人ではなかった。この本は私が長年思い悩んでいた数々の疑問に答えてくれた。この作品に続き『夢のキャラバン』『白痴の知恵』『魔法の修道院』, そして、『皮膚深針』

が矢継ぎ早に発表されたが, いずれも「暗闇の中の象」(“The Elephant in the Dark”)という例え話に言及している。象のそれぞれ違った部分に触った人々が挙って自分が触ったものこそが象の全体像であると信じ込んだという物語である。こういった本やその後出版された本は物語や思想, 韻文や冗談がたっぷりと盛り込まれており, 読者の最初の反応は私自身の経験を含めて, スーフィ教に従来どおりの教え諭し方を期待するべきではないというシャーの言説を裏付ける。それぞれの本を手にとると, まず, 軽い肩すかしを食らったような気分になり, 困惑さえすることがある。この理由は「先生」とか「学校」とか「教授する」という言葉が教壇に立って「次の時間には皆さんにこれこれ云々のことを教えますから, 今はまずエイ, ビー, シー, ディー……から始めましょう」と言うものを連想させるためである。スーフィの学校では最初に教えられること, 特にどのように教えられるかを学ぶ。スーフィの本は私たち西欧人が親しんだ習慣とは異なる読み方をするように意図されている。すなわち, 静かに, 議論せず, 本に書かれていることを喜んで吸収し, ある個所で問題となった答えが別の個所にあることに気が付き, 並列用法や思いも寄らない暗示をしっかり見極め, 特に作者と読者である自分との間に世間で容認された考え方という障壁を差し挟まないようにすることである。(「イドリース・シャーの死に際して」“Summing up: when Idries Shah died” 357-8)

レッシングにとって, 偏見や思い込みを捨て, 理不尽な経験を面白く感じられるように導き諭したのが『スーフィ物語』だったのである。つまり, これは人生の岐路に立つレッシングに過去とは似て非なる未来への道を示した1冊だったので。昨今, アニメや漫画やゲームが日本では特に若者の間では圧倒的な人気を誇っているが, 古典的な文学とは無縁のように見える彼らは人生の半ばになり, 岐路に立った時, どのように解決方法を見つけ, どのような生き方を選ぶのだろうか。1冊の

本と運命的な出会いをしたレスリングが凡人とは異なる特殊な例とも思えないのだが。

ライトノベルを読みふける若者も少なからずいることを考えると、若者の読書離れは学校や家庭等々における教育環境の貧しさにあると考えられる。レスリングは「社会問題、神話、そして、物語」においてどのような本を、どのように読むかが人格形成と密接な関係にあることを繰り返し説き、読書がいかに教育と深く関わっているかを力説している。

余談になるが、2014年9月にロンドンを訪れた際に吃驚したことの1つは1805年にネルソン提督率いる英国艦隊がフランス皇帝ナポレオンのフランスとスペインの連合艦隊を破ったトラファルガーの勝利を記念する広場に、大英帝国の隆盛と繁栄を象徴するそびえ立つネルソン像を愚弄するようにグラスファイバー製のマリンブルーの巨大な雄鶏像（Hahn/Cock）が据えられていたことである。雄鶏は繰り返すまでもなくフランスの象徴である。この雄鶏像はドイツ人の芸術家カタリーナ・フリッツ（Catherina Fritsch）による前衛的作品で2013年7月末から1年半の間広場にロンドン市長の許可を得て展示されるとのことだ。マリンブルーの雄鶏は中国やアラブの資本が激流のように流れ込むイギリスにとって、レスリングに精神的覚醒を促した『スーフィ物語』の焼き直しの1つのように思われる。この像の衝撃的な出現も到着点が未だ不明な人とモノと資金の奔放な流れに乗った有相無相の出来事の1つである。

ロンドンの人口の半分が国外からの移住者という現実を鑑みれば、「雄鶏」よりもさらに衝撃的な芸術作品が台座に乗るのは時間の問題であろう。その時、子供たちはどんな本をよんでいるのだろうか。レスリングの英語を1つ1つ日本語に直していると、このような疑問が自ずと湧いてきた。レスリングの読書経験論とも読み替えられる「社会問題、神話、そして、物語」は、読書が古今東西の別を問わず人格形成に欠かせないことを説くだけでなく、異文化交流とその理解が人間の旺盛な潜在的活力を多層的に引き出すことを明らかに

にする優れた論考である。

尚、巻末の注の項目選択はイギリス文学に長年親しんだ訳者の独断と偏見による。

翻訳のテキストには“Problems, Myths and Stories” *Times Bits: Views and Reviews* (London: Harper Perennial, 2004)を使用した。

『社会問題、神話、そして、物語』

多くの人々は物語や語りを当たり前だと思っている。神話、伝説、寓話、物語という素晴らしい宝庫を娯楽のために覗いたり、映画や演劇の資料に使ったり、論考の要点を解明し比較検討する時に参照したりする。こういう時、この宝庫はいつも傍らにあるが、しかしながら、これについて深く考えることはほとんどない。物語は歴史が落とす長い影のように人類と同じくらい古い。でも、どれほど古いかは誰も知らない。これ以上遡れないほど遠い過去に辿り着くと、無知という暗闇はまもなく調査研究の対象となる。少し考えてください。人類の影はわたしたちの想像をはるかに超えるほど長く遠い。わたしはネアンデルタール人の不平や怒鳴り声を「むかし、むかし…」という物語に進化させたと考えたい。ある文化人類学者に尋ねると、「そんなことは有り得ない。彼らにそんな頭脳はない」との返答だった。勿論、わたしはこれに反論した。「そうは仰いますが、ネアンデルタール人が狩猟から帰ってきて、『祖父の墓参りに行き、祖父が白熊と話しているのを見た』と言ったとは考えられませんか。これが物語です。」「最初の文章は理解できますが、次の文章は無理でしょう。彼らには想像力がありませんからね。」ネアンデルタール人は20万年も続いている。その間に、唸り声は「亡くなった祖母がフクロウと話しているのを見た」というような文章に進化したはずである。わたしたちは過去とそこに生きた人々を侮辱し、人類と動物たちによる過去の功績の頂点に立つ必要性があるのだろう。

わたしたちは最近まで「物語の機能は何か。その目的は何か」と自問したことがなかった。そもそも語ること自体が普通ではないのだ。わたした

ちは常に語っている。あらゆる人が語り、経験を記録し、おそらく作り上げている。スーパーマーケットから帰宅した女性が「ねえ、分かるかしら。チーズ・コーナーでディックを見たの。でも、彼はベッティと一緒にじゃなかったの。誰か知らない女性だったわ」と言えば、それは結末が不明の物語の始まり——そして、中間——である。わたしたちはお互いに終日お話を語り、白昼夢を見て、空想し、そのうえ、眠っている時にも再び物語を語る。何故なら、夢は奔放な超現実であると同時にB級映画のように平凡な日常生活の繰り返しでもあるから。夢は恐ろしく、可笑しい娯楽であると同時に教訓でもあり、意識上では理解不能な事柄を知らせるのである。少なくとも何に関する物語であるかは示唆される。おそらく夢の中には何らかの理由により必要に迫られた結果、経験が整理され、心の他の部分から入ってくる物語もあるだろう。

ごく最近、仮にここ10年か15年としよう。物語は一般的に、学術研究の分野においてさえ教育の一環として活用されている。20年前に物語にこのような機能があると言ったら、嘲られたか無視されただろう。物語は娯楽にすぎなかったから。ところが、物語の社会的有意性が注目を浴びようになると、わたしたちはすぐにこの事実と正面から向き合った。すると間もなく、伝統的な物語はフェミニストたちによって抑圧された人々や、あらゆる政治家たちのメッセージだと解釈された。

先日、著者がカナダ人だったのでカナダ北部だと推測するが、イヌイット社会に関する逸話を読んだ。ある日、幼い少年が森に出かけて気晴らしにネズミを殺し、部族の長老たちはこれを深刻に受け止めた。もし動物が敬意も払われず他愛無く殺されるなら、この行為は食料と毛皮のために人間に殺されるという暗黙の取引条項を否定するため、動物たちは人里へ近づかなくなるから。実際、その通りになり、動物たちは遠のき、部族の人々は餓死し始めた。そこで、少年は命じられたとおり、再び森へ行き、ネズミの件についてあたり一帯にいる動物たちに謝罪した。すると、動物たちは戻った。この逸話は幼い子供たちの教育の

一環として語られた。わたしが知る限り、これは今も昔と変わらない。このことから分かるのは、イヌイットが全員氷と雪の世界で生活しているわけではなく、時にはもっと温暖な地域に暮らしているということである。

ナイジェリア出身の作家であるマリアン・バーは不幸にも既に他界しているが、『長すぎた手紙』という本を執筆した。そこでは、ある中年の女性が身に降りかかった恐ろしい出来事について友人に語る。これは彼女の夫が娘と同じ年齢の少女と恋に落ち、少女と結婚したという話だが、著者自身に夫はいない。但し、大家族にはわたしたちが慣れ親しんだ核家族にはない生活習慣があるため、彼女に家族はいる。著者は「手紙」の中でかつて娘たちが花嫁学校へ通ったように少女が祖母の元で大人になるための教育を受けることを日常茶飯事のように記述している。祖母による教育は娘に本来の立居振る舞い、つまり、慣習、礼儀作法、道德観といった一族と一家の歴史を教える物語から成立している。物語を語り伝えることが教育なのである。世界のある地域では今も依然そのような教育がなされている。物語は娯楽として気楽に読めるので、若者たちの教育のために活用される情報の宝庫とみなさるのである。イギリスの物語はドイツやフランスなど他の国々に比べると、皆無に等しい。グリム兄弟のような人物はいないし、お伽話の大半はフランスから伝播されたものだ。悲運の物語の方が上手く英語に翻訳されることから、由来は容易に推測できる。たびたび他民族に征服され、征服の度に物語の在庫が少なくなったため、このような大なる文化的欠落が生じたのだろうか。ローマ人、彼らは何を破壊したのか。私たちは彼らに400年もの間支配された。それから、アングル族、サクソン族、デーン人、スカンジナビア人、そして、ノルマン人⁽¹⁾。征服者たちはしばしば征服した民族の文化を政策の一環とし

(1) イギリスは民族的には多民族で、ケルト人、ローマ帝国支配下にはローマ人、ローマ帝国滅亡後はゲルマン人のアングル族とサクソン族、次にヴァイキングであるデーン人とスカンジナビア人、そして、ノルマン人が到来した。

て撲滅する。私が育った南ローデシアではイギリス人が土着民を時代遅れとみなし、文明化が進んでいるという立場からショナ族とヌデベル族⁽²⁾の文化を激しく弾劾した。容易に想像できることだが、ローマ人もかつてイギリスに対して同じことをした。わたしにはショナ人の友達があり、彼の祖母が一族の語り部だったため、わたしは彼に物語を書き留めるように頼んだが、彼は一篇も記述できなかった。「イエズス会の修道士たちが全部ばくから叩き出してしまった」と、彼は言った。実際、文字通り、彼は叩かれたのだ。彼は鞭打たれたが、彼に限らず、子供たちは土着文化への傾倒を匂わせると鞭打たれた。2年前、わたしはジンバブエへ飛び、祭りを祝う踊りの会場でイドリース・シャーの『人、蛇、石』⁽³⁾を朗読した（その物語はちょうど良い長さだったから）。あたかもたき火を取り囲み、語り部の話に耳を傾けるような彼らの反応は感動的だった。語りに耳を傾けながら、唸ったり、適所で興奮して手を叩いたり、舌打ちする彼らの能動的な姿勢は私たちの消極的な姿勢とは全く違った。その時、「こんなに多くの物語を忘れていたなんて残念です」と、ある女性は言った。地元の図書館⁽⁴⁾（図書館とは名ばかりで樹蔭かもしれない）に寄贈されたイドリース・シャーの『世界の物語』⁽⁵⁾を読もうとして人々は列をなしていた。「そうそう、こんな話もあったのね——母や祖母や曾祖母が似たような話をよくしてくれたことを覚えているの。」物語は消失したかもしれないし、半ば忘れ去られたかもしれな

いが、原本のままではなくても、おそらく変更ないし脚色されて再生するであろう。

物語はある文化から別の文化へ移り、言わば、民族精神の発散のように自然に生じると考えられる。この本ではこのような考え方に矛盾しない物語が意図的に紹介されている。イドリース・シャーによれば、物語は芸術の巨匠たち、スーフィの信奉者たち⁽⁶⁾、そして、心理の専門家たちによって絶えることなくいろいろな文化に質と目的を異にしながら吸収される。このような物語のなかには即時的な魅力や魔力があるものもある——例えば、シンデレラはいわゆる原型の1つであり、事実上、何百と言う変形がある。その勢いはこれまでのところ測り知れない。教訓的な物語には凡庸な調査では分からない特質があるが、わたしはこれについて語る資格がない。そこで、わたしはもっと低次元、普通の読者とか生徒とか学生のレベルにおける素材の受容と活用法という文学全般について語りたい。現在、文学にはより高度な影響が浸透する領域があると考えなければならない。例えば、簡単に分かることだが、ナスレディン⁽⁷⁾の笑い話は中央アジアでは喫茶店から居酒屋や赤提灯まで至る所で馴致している。また、原典を離れ、小説や短編に形を変える物語もある。『サマラの約束』⁽⁸⁾はその1例である。特定の日に死ぬ運命にある人がたとえ運命を避けようとして場所を移動しても、それは無益である。『シエラ・マドレの宝』⁽⁹⁾における黄金と貪欲の呪いはもう1つの例である。

(2) ショナ族はジンバブエの人口の3分の2を占める部族。ヌデベル族はジンバブエと南アフリカに住む部族。

(3) イドリース・シャー（1924-96）はインドに生まれ、イングランドで育った作家。父親はアフガニスタンの貴族の出身、母親はスコットランド人。イスラム教の神秘主義であるスーフィを西洋に紹介した『スーフィ族』（1964）を表したことで有名。

(4) 2014年8月にレスリングの蔵書の1部（3,000冊）は彼女の遺志によってジンバブエの図書館へ寄贈された。

(5) イドリース・シャーが1979年に表した民話全集。

(6) イスラム教の神秘主義で、シャーによるとフリーメイソン、セバンテス、騎士道、錬金術等々の西欧文化へ多大な影響を与えた。

(7) シャーが著した『スーフィ族』他の作品に登場する喜劇的な人物。パンチャントラと呼ばれる場合もある。

(8) アメリカの作家ジョン・オハラ（1905-70）による1934年の作品。オハラはこの作品において、フォークナー（1897-1962）が作品上で創造したヨクナパトファーと同様の架空の町ギブスヴィルを創造した。

(9) ジョン・ヒューストン監督、ハンフリー・ボガート主演の西部劇映画。公開は1948年。シエラ・マドレはメキシコの山脈。

物語には当然のこととみなされている性質があり、これらを調べると有益かもしれない。物語の源泉の1つは誰もがかつて知っていたにもかかわらず、今やわずかな人しか知らない聖書である。最近まで——第2次世界大戦までとしよう。

知恵は呼ばわれないのか。

悟りは声をあげないのか。

これは未知のほとりの高い所の頂、
また、ちまたの中に立ち、
街の入り口にあるもろもろの門のかたわら、
正門の入り口で呼ばわって言う⁽¹⁰⁾

女から馬得る人は

日が短く、悩みに満ちている。

彼は花のように咲き出て枯れ、

陰のように飛び去って、とどまらない…⁽¹¹⁾

あるいは、

伝道者は言う、空の空、空の空、

いっさいは空である⁽¹²⁾

あるいは、

日の下で人が弄するすべての労苦は

その身になんの益があるか。

世は去り、世は来たる。

しかし地は永遠に変わらない⁽¹³⁾

これらの言い回しは、要するに、教会に通っていたすべての人々、すなはち、人口の大半に影響を及ぼしたのである。学問教育とは物語の語りに他ならないのだ。聖書には血に飢えた残忍な物語から例えば「ルツ」⁽¹⁴⁾のような愛情あふれるもの

まであらゆる種類の物語が含まれているのだ。このように素晴らしい言葉への浸礼は、聖書がラテン語から英語に翻訳されて以来、親から子へと語り継がれた結果、普通の人々にも理解できるようになり、もはや司祭の管轄領分ではなくなった。しかしながら、今やこの声は沈黙している。「ダンマリ」について意見を述べるなら——この現象は現在世界中の至る所で進行中であり、大きな不満の種になっている——一昔前までわたしたちは聖書を聞き、読んだものだが、今ではもう読まないことを誰1人として指摘しないことに吃驚するばかりである。わたしの父は子供のころ日曜日には教会へ2度も参詣し、そのうえ、日曜学校へも引きずられて行った。日曜日は彼と彼の仲間たちにとって毎週やってくるブラックホールだったそうだが、他方では、生涯良書や文学に親しむことができたのは聖書を基にした教育のお陰だとも言っていた。

これは物事の多面性、言い換えると、深遠さに関する教育でもあった。最近の書物にみられる偏狭な判断、紋切り型の善玉と悪玉等が表す薄弱な精神は多様かつ広範な経験の喪失に起因しているのではないだろうか。現在の不満は際限なく続く。「ダンマリ」とは人々が長い語彙を理解できず、分厚い本を読めないことを意味し、祖父母の世代が難なく楽々と読んだ本は今や「難解」になった。この原因の1つは彼らの経験からもう1つの感化力が消えたために違いない。かつて子供たちは教会へ行き、何時間もの間退屈しながら椅子に座らされた時、彼ないし彼女は長い語彙を体得し、難解な概念や精力的で血なまぐさい物語や曖昧な寓話を理解しようと努めなければならなかった。子供のために議論の水準を下げたり、簡単な語彙を選んだり、難しい概念を簡略化する者は1人としていなかった。いかなる譲歩も無かった。教会通いの経験は子供たちに人生とは恐ろしいほど真剣で、理解できない言葉や概念の習得にむけた努力が彼らに求められていることを教えた。言葉にならないメッセージは人生は大切なもので、彼ら自身も大切な存在であり、彼らにはすべてのことが期待されていることだった。

(10) 『欽定訳聖書』「箴言」8章1節～3節。

(11) 同上「ヨブ記」14章1節～2節。

(12) 同上「伝道の書」1章2節。

(13) 同上「伝道の書」1章3節～4節。

(14) ルツは旧約聖書に登場する女性。ボアズの妻、ナオミの義理の娘、ダヴィデの先祖。

ここで、この週末ごとの最も強力な文化的経験とテレビの子供番組とを比べたい。冗談とクスクス笑いだけの番組。すべてのことが一笑される馴れ合い関係。ここでの無言のメッセージは子供たちに期待することは何もなく、難解なことも全く要求されず、大切なことは何もないことである。

時計の針を巻き戻すことはできず、一般的な経験としての教会通いは廃れたが、語りと読書の習慣が消え去ってしまったわけではない。これらを上手く活用すれば、かつて聖書が果たした社会的な機能の復活も可能なはずである。

聖書以外にも影響力のある本はある。例えば、ラムゼイ・ウッドが英訳した『カリラとディンナ』⁽¹⁵⁾である。この物語の起源は濃い霧に包まれた謎の神話に遡る。ある版によると、アレクサンダー大王はインドを去る前、自ら選んだ支配者をその地に残した。彼らの1人は極悪非道な支配をした。そこで、ビドパイという賢者は宮殿に赴き王様を叱責し諫めることにした。彼が妻にその旨を告げると、妻は泣き喚き反対したが、彼は断固として聞き入れず、決意も固く宮殿へ赴き、殿様に謁見した。そして、無鉄砲さの故に地下牢、すなわち、下水道に投げ込まれた。その夜、王様が宮殿の屋上から星を眺めていると、宇宙と言う無限大の元帳では彼も結局のところ小さな存在でしかないという考えが浮かんだ。まさにその瞬間、彼の目前にスーフィ族の幾多の物語に登場する「緑の異邦人」が現れた。「人生でたった1度でも富と権力とは無関係なことを考えた故に、私はおまえにある助言を与えよう。明日、これこれ云々の方向へ狩りに出かけると、宝の山を見つけるだろう」と、緑の異邦人は告げた。翌日、王様は早速家来を従え出かけた。道端で檻を纏った人を見かけると、彼は馬を止め、「おーい、その人。余は約束された宝を探している」と、言った。返答は「あなたさまがダブシュリン王なら、お宝は向こうの洞穴であなたさまを待っております」だった。

王様はその洞穴で山のような宝石と黄金を見つけたが、しばらく歓喜に酔った後、こう言った。「いや、待てよ。余はすでにこのようなものが一杯詰まった宝庫をいくつも所有しているのだ。これ以上どうして必要なのか？」それから、彼は1冊の本を見つけ、それを開いたが、皆目分からなかった。宮殿へ持ち帰り、何とか理解しようとした。そうこうしているうちに、地下牢へ投げ込んだ賢者のことを遂に思い出した。彼は賢者を地下牢から連れ出し、身体を洗わせ、御前へ連れて来させた。「この本の内容を余に説明することはできるか」と、彼が詰問すると、賢者はできると答え、すぐに教授開始となった。この本の歴史はこうにして始まった。これは膨大な動物の物語と寓話を収集した大全集であり、その中には仏様が鹿や猿や獅子だった頃の仏教の正典に含まれるものもある。実際、インド北部の岩場に彫られたものが後年幾つか発見されている。これらの物語がどれほど古いかは分からなかった。そこで、この起源を再度調査すると、歴史はさらに過去に向かって紐解かれた…ずっとずっと昔に…。この本の出典の1つはカウティリヤという人物⁽¹⁶⁾が紀元前300年に行政術について表した論文だった。彼は統治と行政に関する数多くの論文を表した一連の執筆者の最終者だが、今となっては何故こんなに由緒正しく古い書物を新参者の彼が発見できたのかを知るすべはない。「伝道の書」に記述されている「本の制作には際限がない」という言葉を思い出すが、結局のところ、彼を疲れ果てさせるほどあった夥しい数の書物のうち、現存するものはほとんどない。

この本は時として賢者の名に因んで『ビドパイ物語』、あるいは、『カリラとディンナ』と呼ばれ、何百年もの間脈々と民衆の間で力強く継承されている。「聖書よりも広域にわたり翻訳されている」とも言われている。イギリスでは16世紀にサー・トマス・ノースが初めて英訳した。ノースはペト

(15) アラブ地方で2000年以上もの間、広く人気がある物語。

(16) 紀元前4世紀のヒンズー教徒。彼の指導により、チャンドクグプタはアレクサンダー大王のインド領を継承し、マウリヤ王朝の開祖になった。

ラルカの作品を翻訳し、それはシェイクスピアのローマ文化に対する知識と理解の源泉となった。それ以降、この本は版を重ね、1888年までの数百年の間に20版を重ねるに至った。但し、それ以降は全くない。かつて、文学的教育を受けたい者は皆『ビドパイ物語』を読んだが、今では題名を耳にする者さえほとんどいない。

ペルシャ人はインドにおいて為政者の教育のために使用される不思議な本のことを聞き、大使たちを派遣したが、大使たちは本が堅固に守られていたため、盗み出さなければならなかった。これは彼らにとっても貴重本になった。その後、多くの言語に翻訳され、その物語は東へ西へ北へ南へと広まり、各地の文化に同化吸収された。メキシコの大学に滞在した時、ある教授から聞いた話だが、物語を繰り返し語る農奴たちがそれらをスペインのものだと信じるほどこの本で紹介される物語と概念はスペイン文化に同化していた。

物語の粗筋は人生に飽きた為政者を中心に展開する。迷子になり、付近を彷徨っていた白い牛が発見されたと告げられた王子は、牛を御前に連れてくるように命じた。そして、牛は彼の友となり相談相手になった。ところが、カリラとディンナの2頭のジャッカルは王様に対する高貴な牛の影響に嫉妬し、牛を殺害させた。想像に難くないが、世界中の民百姓や普通の人々はこの出来事が何を意味するかをこの書が手引書として与えられた王子たちと同じように容易に理解した。マキャヴェリの『君主論』⁽¹⁷⁾はこの流れを汲む本だと考えられている。また、スーフィ教徒の由来に関する『カノーブス座の光』⁽¹⁸⁾という素晴らしいペルシャの本も数世紀後にこの書を手本にして書かれたそう。この本が民俗文化だけでなく文学全般に与えた影響はなんと素晴らしいのだろう。これから靈感を得たムガル族の図解芸術は今でも大英博物館で目にすることができる。

聖書なくしてイギリス文学を語れないように『ビドパイ物語』なくしてヨーロッパ文化を語ることはできないのだ。

ところで、聖書や『ビドパイ物語』よりずっと以前から今日に至るまで続く文化的影響もある。かつて人類は「神託」を利用し、神聖な存在から発せられる声によってさまざまな疑問に対する答えを得たが、今日、これは身の上相談の変形の1つとみなされる傾向にある。昔々、人々は遠路はるばる旅をしてご神託をうかがったが、今も昔と変わらず、わたしたちは何をしたらよいのか、また、どのように考えたらよいのかについて問題解決の担当者や専門的な指導者に教えるを乞う。「神託」は決して過去の遺物ではない。例えば、ジンバブエには神殿等々の神聖な場所があり、そこでは賢人である占い師が男女の性別なく今も長老、あるいは、超俗的な指導者の名のもとに助言を与えている。こういった人々は熟練した政治家であり、かつての神託現象に解明の光を当てることができるかもしれない。何故なら、現代においてさえ畏敬の念と信仰心、少なくとも信仰への欲望を掻き立てる神託現象はあるのだから。

近年、マタベレランドにあるアラン・ウィルソンの記念碑⁽¹⁹⁾の周りに大群衆が押し寄せた。彼の名前はいつも「最後の砦」という言葉と切り離せないのだが。アラン・ウィルソンの「最後の砦」は白人の子供たちには手本を示す物語だった。彼とその仲間たちは襲撃してくるマタベレの戦士たちに立ち向かい一歩も引かず、殺された。記念碑は白人にとって自らの存在意義を明らかにする崇敬物である一方、黒人はそれを白人の征服を象徴するものとして忌み嫌った。占い師たちはまさにこの記念碑がある場所で英知を語り伝えたのである。白人であれ黒人であれ、群衆は皆この場所の選択に激しく抗議した。そこで「賢者たち」は次

(17) イタリアのフロレンスの外交官・政治理論家であるマキャヴェリ(1469-1528)の『君主論』は1505年頃に執筆され、1515年に出版される。

(18) 『カリラとディンナ』のペルシャ語版。制作は19世紀から13世紀まで遡る。

(19) アラン・ウィルソン(1856-93)はスコットランド生まれのイギリス陸軍将校。ローデシアにおける第1次マタベレ戦争で主力部隊から逸れ、彼とのかの部下33名はヌデベル軍に負け、1893年12月4日に戦死。彼の愛国心を称える『ウィルソンの最後の砦』は1899年に映画化(無声)された。

のように語った——少なくとも私にはこのように報告された。

なぜ我々がこの場所で語るべきではないのだ？
あぁ、目前の利益に目が眩み、なんと近視眼的になってしまったことか。あなた方は離れた遠くから、高邁な視点から物事をとらえられないのだ。アラン・ウィルソンは自らを信じる者のために戦った勇敢な戦士だった。そして、彼は同じく勇敢な戦士たちの手によって名誉の戦死を遂げた。アランは彼を殺害した勇者と同じくジンバブエの礎である。我々は彼を讃えなければならない。あなた方はいつになれば我々と同じように安直な復讐や報復を拒否し、遠い将来を見定めた判断方法を理解できるようになるのか。

この発言はこの状況下では爆弾だった。ムガベ大統領がヌデベル族を大量虐殺したため⁽²⁰⁾、マタベランド全土が憤怒と復讐心で燦っていたから。ムガベは今も昔と変わらず白人に対する黒人の憎悪を扇動している。しかしながら、ここに「先祖たち」の代弁者が現れ、一般的に感じたり語ったりすることより伝統的な英知を優るものとした。これは時が経てば明らかになる謎解きの衣を着せられた助言ではない。この出来事や似たような他の出来事について理解を深めるにつけ、昔の神託も現代の政治や政策と同じように人事に介入したことが分かる。

この出来事にはさらに付加すべきことがある。それは遙か昔のことのように見える冒険談を連想させる語り口調である。冒険談は何世紀にもわたり、権力者の大広間や、掘立小屋や、市場や、熊や狼避けの森のかがり火の傍で語られたり、歌われたりした。歴史物語は民族観を明確にし、立ち居振る舞いと名誉に関する掟を補強した。はるか昔のことだが、今もその影響は根強く残っている。

アイスランドでは現代の人々が歴史物語に登場する人物について熱心に議論するのを耳にすることがあるだろう。『ニャールのサガ』と呼ばれる歴史物語には、女性解放運動によって今日に蘇ったハルゲルドールという我儘な女性が登場する⁽²¹⁾。男性陣が彼女を嫌う一方、女性陣は賞賛するそうだが、肝心なことは物語が今も語り継がれ、影響力があることだ。

ただし、この物語は口伝承である。今日、物語とか小話について語る時、人類の歴史の大半において、すなわち、何万年もの間、物語が語るか歌われたという事実はしばしば忘れられる。ずっと後に誕生した読書は比較的最近の慣例であり、読書は物語の受容方法だけでなく心の働きをも大きく変容させた。そして、印刷革命は部分的ではあってもわたしたちの記憶を奪ったのである。それ以前、情報は人々の脳裏に記憶された。かつてのわたしたちの姿、つまり、皆が似たような状態だった時代を思い出させる文盲の老いた男女に今も出会うかもしれない。彼らはいつ、誰が、何を、なぜ語ったのかについて、日時、場所、話しぶり、歴史を含めたすべてを覚えている。参考書に頼る必要はない。このような記憶の機能は印刷の普及とともに消滅したのである。これは想定外の結果であろう。この文脈から考えると、テレビやラジオ、インターネットやコンピュータ等々の現代の技術革命はどのような予期しない変化をもたらすのだろうか。わたしたちの精神と心はどのように感化されるのか。変化は果たして有益なのだろうか。

今日、小説についてまず思い浮かべることは、小説が最も代表的な文学形式であることだ。セルバンテス⁽²²⁾を起点にしたとしても、小説の形式は最も新しい。18世紀のイギリス文学を起点とするなら、なおさら新しいことになる。小説が近代社会に最適の芸術形式だと唱え続けられた結果、

(20) ロバート・ムガベ(1920-)はジンバブエの政治家。1980年にジンバブエ共和国の首相に就任し、1987年から大統領になる。カトリック教徒。

(21) ジョージ・デイセント(1817-96)が1900年に出版した作品。

(22) セルバンテス(1547-1616)はスペインの小説家。代表作は『ドンキホーテ』(1605, 1615)。

わたしたちは小説が日々の生活に関する情報、異なる文化や民族、そして、多種多様な思想を収める宝庫であることをあまりにも当然のこととして受け入れている。

ところが、小説は絶えず論争の最中にあるのだ。わたしが1949年にイングランドへ来て以来、小説の使命は終わったという言説がずっと続いている。これは批評家たちの不満の十八番である。にもかかわらず、小説はどこを見ても隆盛を極めていようだ。独裁者たちは小説を危険視してきたし、今も敵視している。実際、ソルジェニーツィンの『収容所列島』は一般的にソビエト帝国崩壊の主要因だと言われている⁽²³⁾。そして、道学者と説教者が小説を軽薄で不道德だとみなした時期もあった。ジェイン・オースティンは『ノーサンガー寺院』において、小説が軽薄だという非難に対して次のように上手に小説を弁護した。

世間の人々は、小説家の才能を貶し、努力を見くびり、ただ天才と機知と趣味によって人に訴える小説作品を軽んじたがっているようです。「わたしは小説の愛読者ではないの…小説なんかめったに覗いてみないのよ…わたしが折々小説を読んでいるなんて思わないでください…まだこれなんか上々のほうよ…」これが世間一般の言葉なのです。「何をお読みになっていられるの、——さん」「ええ、つまらない小説ですの」と娘さんはわざと冷淡そうに本を下に置くか、あるいは一瞬恥ずかしそうにしながら言う。「ええと、『セシリア』か、『カミラ』か、『ベリンダー』なの」つまり、それはこちらの最大能力が表れ、人間性についてのくまなき知識と、人間性の種々相の最も適切な描写と、機知と滑稽味の最も澆刺たる流露とを、えり抜きの言葉で世界へ伝える著作に過ぎない、とい

うことなのです⁽²⁴⁾。

小説はいつも人々の話題にのぼるような人物や状況を提供し、互いに（必ずしも幸福とは言えないが）競り合わせたり、あるいは、避けさせたりしたのである。ゲーテの『若きヴェルテルの悩み』⁽²⁵⁾は記憶に新しいが、この小説を読んだヨーロッパ中の若者たちは崖から飛び降りたり車輪の下に身を投じたりした。放蕩息子の典型であるラブレイス⁽²⁶⁾は当時の文学、特にロシア文学に影響を及ぼし、ラスコーリニコフ⁽²⁷⁾についてはラブレイスなくしては語れない。また、ベッキー・シャープは社交界でも文学界でも真新しいタイプの若い女性だったのである⁽²⁸⁾。

従って、文学作品の中に実在の人物や、立居振る舞いの良し悪しに関するコメントや、教訓を探すことは全然珍しくなく、わたしたちは日常的にそうしている。小説は想像できる限り古い動物の

(23) ソルジェニーツィン（1918-2008）は旧ソ連・ロシアの小説家。1973年に旧ソ連から追放され、1974年以降アメリカ合衆国に在住。1994年に帰国。1970年にノーベル文学賞を受賞。『収容所群島』（1973）は代表作。

(24) 『ノーサンガー寺院』第5章。日本語訳については富田彬訳『ノーサンガー寺院』を参考にした。この作品の著者はイギリスの小説家ジェイン・オースティン（1775-1817）。『ノーサンガー寺院』（1817）は彼女の最初の長編小説。引用文中で言及される『セシリア』は1782年に出版されたファニー・バーニー（1752-1842）の作品。『カミラ』は1796年に出版されたバーニーの作品。『ベリンダー』は1801年に出版されたマライア・エッジワース（1767-1849）の作品。

(25) ゲーテ（1749-1832）はドイツの詩人、劇作家、小説家、哲学者。書簡体小説『若きヴェルテルの悩み』でロマン主義運動（疾風怒濤期）の代表者となる。

(26) ラブレイスはイギリスの小説家サミュエル・リチャードソン（1689-1761）による『クラリッサ』（1747-48）に登場する悪漢。彼はヒロインを誘惑し強姦し、死に追いやった後、自らも自殺する。

(27) ラスコーリニコフはロシアの小説家ドストエフスキー（1821-81）による『罪と罰』（1866）の主人公で、非凡人にはすべてが許されるという幻想に憑かれ、金貸しの老婆を殺害する。

(28) ベッキー・シャープはイギリスの小説家ウィリアム・サッカレー（1811-63）による『虚栄の市』（1848）に登場する新しいタイプのヒロイン（アンチ・ヒーローと呼ぶほうがふさわしい）。彼女の人生は無一文の若い女性の挑戦として描かれている。

寓話、聖書の寓話、歴史物語、叙事詩、さらに、11世紀から14世紀にかけてフランスやスペインやイタリアで活躍した吟遊詩人たちから物語と語りの伝統を受け継いだのである。

ヨハあるいはホヤとして知られるナスレディンという人物はアルバニアからアフガニスタンにかけての東洋の地域において文化的雛形を提供した。ナスレディン／ヨハ／ホヤの物語は西洋でも久しく流布しているが、1960年代にイドリース・シャーはスーフィ教徒の物語を題材にして、ナスレディンの物語を斬新な形で西洋に再導入した。シャーによれば、彼がわたしたちに提供する題材はわたしたち自身を映す鏡だった。要するに、彼はわたしたちの既成の姿を明快に図解したのである。ナスレディンの物語に登場する男性は地面から鏡を拾い上げ、そこに映る姿にしかめ面をし、それを遺棄すべき何か不快なものだと判断し、そして、捨てた。鏡に映るものが何であったにしろ、シャーの作品は衝撃的で、私たちが略して「成長」と呼ぶ過程を一気に加速化させた。周知のように、20歳の時に読んだ小説や物語を50歳、あるいは、70歳になってから読むと、それは全く異なる作品のように思える。ところが、スーフィ教徒の物語は年毎に、しかも、読み手が変わる度に変化し、わたしたちが急速に加速する変化の過程の真っ直中にいることを仄めかすのである。シャーの作品を読むと、この特質が最も際立ち、最も容易に理解できるような気がする。

ナスレディンの物語を20回も読むと、最初は単調で要領を得ず、冗談ではない小話も突然意味が明らかになる。これは素晴らしい読書経験である。意味は1つではないかもしれない。何が起こったのか？変わったのは物語でなく、私たち自身である。あるいは、物語のもう1つの諸相である素材の故に、わたしたちは初めて高揚し、知覚が鋭く研ぎ澄まされた状態で読んでいるのだ。昔から言われ続けられていることだが、精神は絶えず揺れ動き、わたしたちはそのことにほとんど気付かないか、あるいは、粗野な表れにしか気付かないのである。現在、感じていることを昨日の自分、そして、明日かもしくは1時間後の自分と比べて、

「今日は調子が悪い」とか「集中できない」と言う。ある日、1節を読み、活気にあふれ、生き生きし、刺激的だと感じるかもしれないが、同じ1節を1週間後に読むと、退屈し、以前の悦びはない。とは言え、精神の揺らぎを学ぶのにシャーの題材は不必要である。そういうことは凡庸な本の場合にも起こる。例えば、わたしはかつてイザベラ・バードの「ある婦人のロッキー山中滞在記」⁽²⁹⁾を読んだが、情景がまざまざと心に浮かび、わたしは暴風雨の中、カーディガン1つを防寒具として羽織り、山道を馬で降りる大胆な女性になった。ストッキングを脱いで、絶壁と断崖が左右から迫る凍り付いた山道から馬がすべり落ちないように蹄にストッキングを丸めて詰めていたため、脚は冷えきっていた。わたしは氷点下ゼロの夜、山小屋で身を横たえ、屋根の穴から雪片が床と自分の上に降り注ぐ中、その穴から星を見上げた。ところが、1か月ほど経ってからもう1度それを読むと、魔法はすっかり消えていた。このような経験をする、スーフィ物語を読むまでもなく精神の信頼性を疑いたくなるし、そのうえ、新しい視点からより熱心に検証したくなるだろう。

わたしたちは過去何世紀にもわたって気まぐれに本を開き、占いや助言を探してきたが、シャーの作品もこのように活用すべきであると主張するつもりは毛頭ない。「何をしたら良いか分からないから、聖書を開いてみると、『恐れるなかれ、恥じることはないから』という1節に出合ったので、トウモロコシを売ることにした。」ざっとまあ、こんな使われ方である。しかしながら、シャーの作品を完全に理解できる読者なら、似たような状況に陥った時、物語が自然に次々と脳裏に浮かび、自身がどのような状況にいるのか、また、どのような選択の道があるのかを吟味できるようになる。

(29) イザベラ・バード (1831-1904) はイギリスの紀行作家。代表作に来日体験を著した『日本奥地紀行』(1880)がある。「ある婦人のロッキー山中滞在記」は『アメリカ紀行』(1856)に収められた1編。近年、日本でも彼女の旅行記は注目されている。

イドリース・シャーの作品を大量に読むと、精神が深遠に広がらないことはない。災難（自動車事故とか飛行機の墜落とか）がふりかかった時、「彼が倒れると、私の首が折れる」に要約されるナスレディン物語の内容に夢中なら、「どうして私に？」と問うことはないだろう。わたしを大笑いさせると同時に、誰にでもある唯我論的な志向を思い出させる小話がある。ナスレディンは妻を起こし、世界は人類の利益のために作られているという主旨の啓示を受けたと告げる。「ねえ、おまえ、考えてもみなさい、もしラクダに羽があったなら、ラクダは屋根の上を歩き回り、胃の反芻物を吐き散らすだろう。そうなったら、厄介なことになるだろう。」

また、意外な反響もある。例えば、あなたが陥っている矛盾とは一見無関係な物語が心に浮かぶ（こうなると、当然、精神が機能不全に陥っているのではないかと心配になるだろう）。しかしながら、何とかやっているうちに関連性は歴然となる。同じことは夢の驚くようなメッセージにも言える。

冗談や物語を聞いた他の人々の反応は予想外だろうが非常に有益でもある。ナスレディンがロバに乗っていると、前方の池でカエルが大きな声でゲロゲロ鳴いたのでロバは後退った。彼は池に落ちるのを免れ、一握りの金を池に投げ込んだ。理由を聞かれ、彼はカエルへの褒美だと答えた。

この逸話を聞いた友人は怒りを爆発させた。上品な驚きでなく、信じ難いために文字通り怒りの雄叫びをあげた。彼はカエルに不要なものが与えられたことが許せなかったのである。もうお分かりのように、この男性は私が知る限り最も卑しく、狡く、悪辣である。

ワインはしばしばある心理状態の類推と言われる。シャーの作品を読んだばかりの若者の1人が全部酒の話ばかりだと文句を言いに来たことがある。わたしは「君こそ嘘が多い人間の見本ではないの」と冗談を言った。この嘔吐きは、実際には百科事典には金銭への言及はほとんどないにもかかわらず、全部がお金の話だと事典の編集者に文句を言ったのだ。「酒のことばかりだ」と言うこ

の若者は彼自身がアルコール中毒だった。既に多くのことが記述され議論されているように、何かに対する強烈な反応が秘密の誘因、敵愾心、そして、中毒を隠蔽（ないし暴露）することに気付かない人はいないだろう。

ナスレディンの物語には美人と醜女の2人の妻がいる男性の話がある。妻が2人とも溺れている場合、どちらの妻を助けるかと尋ねられると、彼は醜女に向かって「ねえ、おまえは泳げるのかい」と尋ねる。これを「性差別の話」と解釈したフェミニストがシャーの作品を全面的に拒否するのを聞いたことがある。

教師が若者を殴って水を汲んで来させるのには、水をまき散らした後で殴るような羽目に陥るのが無益だという観点から、「不公平」だと反対する人がいる。この場合、当人が権威について問題を抱えていることは容易に理解できる。

知人の男性はナスレディン物語を読み、特定の人と商売をしないことにした。ナスレディンは定期的に国境を越えて商売をしていた。税関の官吏たちは彼が密輸しているのを知っていたが、彼を決して逮捕しなかった。何年も経ち、彼も税関の役人たちも現役を退いた時、彼らは彼に一体何を密輸していたのかと尋ねた。すると、彼は「ロバだ」と答えた。知人の相棒だった男性はこの話を税関を欺く方法に関する助言だと解釈した。「俺はこのシャーという奴が気に入った。此奴は商売を心得ている」と、彼は曲解したのだ。

シャーの作品を繰り返し読むと、わたしたちの文化には他の文化には取り込まれている高邁な思想や経験に対するある種の姿勢が欠落していることに気付く。例えば、東洋のある地域では物語が語られると、聞き手は「この話から何を学べるのかしら」と尋ねるだろう。少なくとも、物語の灰めかしは興味をそそる。このような態度はかつてわたしたちにもあったにもかかわらず、今は喪失したのだろうか。仮にかつての戦時のアフガニスタンにおいて、当たり前のように子供が物語についてどう思うかを尋ねられる場面を想像できるだろうか。子供がすでにお話という魔法やユーモアから醒めている時に。よく知りもしないうえに、

既に失った機能を挙げるとすれば、他に何があるのだろうか。おそらく、それは未だかつて習得したことがない機能ではないのか？あるいは、ほんの一握りの人だけが習得していたのではないか。至る所にこの問題に関する暗示や仄めかしがある。

真面目な人々が文学について真剣に考えるのはおよそ 1950 年代の終わりまで普通のことだった。わたしは快樂主義、つまり、1960 年代（「覚えていたなら、君はそこに存在しなかったのだ」と、皆が自慢げに語った時代）の薬物が諸々の社会的な基準を全般的に低下させ、文明の野蛮化に拍車をかけたと考える。

「高学歴志向」はかつて社会現象になったが、彼らは読書が教育の一部だと信じ込んでいた。彼らは自国の古典的な作品、当時定評のあった現代文学、おそらく、ヨーロッパの他の国の有名な古典、さらにギリシャ語とラテン語を基盤とするあらゆる作品を知っていた（勿論、これはヨーロッパを中心にした教育だった）。彼らの読書リストには、多分、『ヴェーダ』こと『マハーバーラタ』⁽³⁰⁾と、1 世紀前までなら『ビドパイ物語』こと『カリラとディンナ』という東洋の古典作品も数冊加わっただろう。昔の小説では社会的上昇志向の強い貧しい人々が書物を重宝することを考慮すると、この教育は上流階級の人々だけのものではなかったのだ。

この時期、わたしたちは最良の書物を読むことができた。しかし、文学はそれ以降地理的に至る所で爆発的に増え続け、その結果、ある国を訪れて「良い本のリストを下さい」と言うと、分厚い数ページのリストが渡されるようになった。かつて作家がほとんどいないか、あるいは、全然いなかった国々にも現在は大勢いる。小説は旅上手である…しかも、著者を除けば作品の本質を知る者がいない故に、小説は常にその創造者となる。イ

ギリスでは『トム・ジョーンズ』⁽³¹⁾から始まる形式はピカレスク小説⁽³²⁾、『トリストラム・シャンディ』⁽³³⁾のような現実離れした風刺小説、そして、『クラリッサ』のような書簡体小説等々の小説という芸術形態は、あるべき形式に関する拘束を一切受けない。この柔軟性の故に小説はいかなる文化にも適応できるのである。例えば、ジンバブエでは祖母を語り部とし、口承の伝統を受け継いだ作家たちが優れた小説を書いている。小説は何百という新しい形式に増殖するため、その普及は地理的な広がりだけに限定されない。科学小説、宇宙小説、女性文学、黒人文学、南アメリカの「マジック・リアリズム」⁽³⁴⁾、類事実（これは記録と想像が稀に著しく巧く融合する分野である）、コンピュータ言語を使った小説等々、枚挙に暇がない。従って、今日、かのゲートでさえ活字化された素晴らしい小説をすべて読むことはできないはずだし、ここ 30 年の間にすべての小説を読んだ人はいないはずだ。このような現象は未だかつてなかった。「教養人」は「時勢に遅れない」ことを諦めなければならず、おそらく専門的な技術を磨いている。「正統な文学」を軽蔑する科学小説の熱狂的な愛好者や、逆に、科学小説や宇宙小説を読もうとは夢にも思わない人と出会うかもしれない。しかし、悲しいかな、新しい俗物は息をする度に生まれているのだ。

この新しい難題に対処するために様々な防衛手

(30) 『マハーバーラタ』は古代インドの民族大叙事詩。18 編 10 万頌の詩句と付録 1 編 6000 頌からなり、主にクル族とバンドゥー属の両王家間の戦闘を題材とする。『ヴェーダ』はバラモン教の宗教文献（聖典）の総称。

(31) 『トム・ジョーンズ』(1749) はイギリスの小説家、劇作家、治安判事であるヘンリー・フィールディング (1707-54) の代表作。フィールディングは治安判事としても有能で、ロンドンで初めて警察組織「ボウ・ストリート・ランナーズ」を結成した。

(32) ピカレスク小説は悪党の一生を描いた小説。ピカレスクは「悪党」を意味するスペイン語 'pica-ro' を語源とする。

(33) 『トリストラム・シャンディ』(1759-67) はイギリスの小説家、牧師であるロレンス・スターン (1713-68) の代表作。

(34) マジック・リアリズムはリアリズムとファンタジーという対立する表現様式を結合させる表現方法。フランツ・ロウによる造語で、初出は 1925 年。ラテンアメリカの作家による作品を説明する用語として用いられることが多い。

段が開発されている。ある者は昔ながらの野蛮人になり、彼ないし彼女が理解できない文化に直面すると、そりゃ全然役に立たないと言う——「死んだ白人男性」という表現は的を射ている。優れた作家とか悪い作家という区別はなく、すべての作家が同じだという人もいる——しかしながら、極端な事例（大抵の場合）学術的な愚かさに時間を無駄に費やす必要はない。

文学がこのように拡散し増殖すると同時に、全く新しい現象も起きている。若い世代の人々は研究に15年、あるいは、20年を費やし、賞を総なめにし、拍手喝采を浴びる反面、彼らは何も読まず、学校や大学のカリキュラム以外のことを全く知らず、無知であるだけでなく無関心である。こういう若者と1時間も過ごせば、教育に対して抱いていた考えが揺らぐだろう。「きみは読書が教育の一環であることが当たり前ではなくなった最初の世代だと分かっているのか？」と口にしようものなら、強い反感を買い、「おまえはエリート主義者だ」と罵倒されるだろう。彼らは自身のこと、友人のこと、有名人のゴシップ、買い物、そして、食べ物についてしか語らないので、彼らと会話はできない。彼らは狭く閉じた窮屈な自分の世界にいる。彼らが20代になり、読書経験がある同年代の者と比べ、自分が不利な状況にいることを自覚すると、彼らは初めて遅れを取り戻そうと努力し始めるのだ。読書習慣がない場合は簡単でなく、習慣の欠如から、おそらくゆっくりとしか読めないだろう。しかも、性や仕事だけでなく薬物を含めた大人の世界の圧力とも戦いながら。

子供に読書習慣を習得させる試みが熱心な薦め、講義、書物の便利な入手方法の紹介など数多くなされている。しかし、どの世代の人でも子供に簡単に読書をさせることはできない。

もし読者の皆さんが読書世代に属しているなら否応なく頻繁に気付くことだが、読書には参考図

書や情報や知識の全体的な網、すなわち、地図がある。繰り返すまでもなく、読書は実際に受けた教育を補充し拡大する副次的な教育である。同世代の人とならこの網、織物、参照文献の範囲内で会話することができるが、しかしながら、もっと若い世代の人が相手になると、「そんな言葉は知らない、どういう意味ですか」という返答を聞かれないようにするために、言葉を選び、長い語句を可能な限り使用しないようにする。例えば、ゲーテに不用意に言及すると、ぼかんとした反応が返ってくる。「それって、何ですか。」パタゴニア、文化大革命、モンゴル人——「それって、何ですか。」ルネサンス、1917年のロシア革命、ダンテ……「それって、何ですか。それって、何だったのですか。」

引証参考文献

I. 文献資料

Doris Lessing. "Problems, Myths and Stories" *Times Bites: Views & Reviews*. London: Harper Perennial, 2004

———. "Summing up: when Idries Shah died" *Times Bites: Views & Reviews*. London: Harper Perennial, 2004.

———. "A book that changed me" *Times Bites: Views & Reviews*. London: Harper Perennial, 2004.

———. *Walking in the Shade: Volume Two of My Autobiography. 1949-1962*. 1968; London: Flamingo, 1998.

ジェイン・オースティン『ノーザンガー寺院』富田彬訳、『ジェイン・オースティン著作集』4, 東京, 文泉堂出版, 1996年。

日本聖書協会編『聖書』東京, 1955年（改訳）

II. ウェブ資料

『シャー, イドリース』

http://en.wikipedia.org/wiki/Idreas_Shah

『ビドバイ物語』

<http://www.fablespower.com/fables-bidpai.html>

A Japanese Translation and Interpretation
of “Problem, Myths and Stories”
by Doris Lessing (1999)

MATSUMURA Toyoko

Abstract

“Problem, Myths and Stories” (1999) is a revised lecture Doris Lessing read at the Institute for Cultural Research in London. Here Lessing argues that storytelling has persisted since the beginning of human history. She repeatedly stresses how the telling and retelling of stories enriches and enlightens our lives with a sense of peace and faith, because she worries about the decline of reading in modern England. The most interesting point of this paper is that Lessing relates her own reading experience, especially how a single book has changed her thinking and feeling and fulfilled her life. That book was *The Sufis* by Idries Shah, translated into English in 1964, and introduced to the United Kingdom. The book helped her recover her deep loss of faith in Western culture after the devastation of World War II and the rise of Communism. She had respected Shah as a reliable mentor as long as she lived.

The main purpose of translating the paper into Japanese is to consider how Lessing’s unique and useful ideas about myths and stories enlighten and educate Japanese youth who are dependent on IT and comics.